

園行事と日本の祭り文化のつながりに関する論考

～祭りに向けた共同体の凝集性と

人と人がよるこびへ向かう文化に着目して～

Nursery events relationship
with Japanese festival culture :
Community cohesiveness for the festival
and Focusing on the culture in which people are happy

千葉直紀
CHIBA Naoki

キーワード：園行事 祭り 籠る

1. はじめに

現代の幼児教育・保育（以下保育と記す）は、平成27年に施行された子ども・子育て支援新制度や平成29年告示の「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」という三法同時改定、さらには保育の無償化等、保育は今、大きな変革の最中にあるといえる。保育現場は制度的な変革により、保育者や子育て支援員の養成・または保育施設の量的な拡充が行われ、施設や保育者の増加に伴い待機児童は緩やかに減少している¹。しかし、待機児童や保育士不足の問題のみを解決しようとする規制緩和により、保育の質の低下も甚だしいものとなっている。実際、保育中の事故や保育者による虐待も報道で頻繁に聞かれるようになり、その内容も含め看過できない状況にあるといえる²。これらの質の低下の要因は、待機児童解消を目的とした保育者の量的な確保と保育施設の拡充だけといえるだろうか。いや、それだけではない。このような保育の制度的変遷によって質が低下していることも大きい。保育実践の形骸化が顕著といえる。つまり、質の低下は、制度的な変遷だけではなく保育実践の中にこそ見てとることができるのではないかということである。

野崎（2018）は、保育者の保育業務の変化について調査を行い、保育業務内容の増加している項目や削減されている内容について研究結果を示している。その中で注目すべきは、「過去と

現在を比較して増加したと思う保育業務」についての調査である。その注目すべき上位4つは、ヒヤリハットなどの「危機管理業務及び書類の作成」、ICTシステムの導入などの「ICT化に伴う業務」、保育要録などの「保育記録の作成」、消毒や残留塩素測定などの「健康管理・生活関連業務」としている³。このように、上位4つまでが書類作成や消毒作業など子どもに直接関わること以外の業務である。保育をすすめる上で重要なことは子どもの育ちであり、その部分に力がかかる力が最も大きくなければならないはずである。しかし、近年増加している業務を見ると、保育者として行わなければならない業務において、子どもとの直接的な関わりではない4つが重要な業務内容となってしまうのである。時間や労働力が子どもとの関わり注がれないということは、保育実践の形骸化、つまり形だけに囚われた保育になってしまう危険性をはらんでいるのである。さらに、上記の4つに続いて5・6番目を見てみると、「発達障害のある園児への対応」、「保護者との連携に関する業務」⁴となっている。書類等に引き続き、発達障害のある園児や保護者との連携、苦情対応など、どれもつぎつぎに起こる事態に日々対応していく業務といえる。このように保育業務から見ても保育者は「～なければならない業務」に追われてしまい、自らの保育実践に磨きをかけるところにまで意識が回らなくなってしまうといえる。つまり、行わなければならない作業に追われ、形だけで保育をすすめるという保育になりかねないのである。さらに、平成29年告示の「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」三法同時改定においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「小学校教育」⁵との接続などが盛り込まれており、このことを保育者側が「～なければならない業務」と捉えてしまった場合、保育実践の形骸化がさらに加速する要因となりうる。

加えて、野崎(2018)は「過去と現在を比較して縮小・削減したと思う保育業務」の1位に「園内行事」があげられたという結果を示している⁶。多様な業務や書類作成の業務が増加したから園内行事(以下、園行事と記す)を削減したのだろうか。園行事という視点から保育実践の形骸化を見ていくと森林(1991)が、園行事の問題点を①競争主義②見せ物主義③マンネリ化の3つ⁷であることを強調した上でその問題点について述べている。園行事の課題については、奥山(1997)も「多くの行事が次々に実施され、行事の実施だけで保育時間のほとんどが費やされたり、慣習によってそれまで実施されてきた行事を踏襲してしまうために行事の実施自体が保育の目的になってしまったりする」⁸などの課題をあげている。このように、園行事は、慣習として園の方針として行われていることが少なくない。そうなるとなますます新規に勤める保育者にとって、あたり前に行うものとして保育実践の形骸化が進むばかりである。さらに近年では、ハロウィンなどの行事を積極的に取り入れ、行い易さや手軽で分かりやすいものを園行事に取り入れていることも多く、行事の形骸化ばかりか便利化が顕著である。果たして園行事は子どもにとってどのような意味を持つ催しなのだろうか。競争主義や見せ物主義、マンネリ化とあるがその視点のみで捉えて良い問題なのだろうか。いや、それだけではないはずである。行事を行うことの批判はあるが、行事を行わないこともその根源的な意味をしっかりと捉えた上で考えていかななくてはならない。新型コロナウイルス(COVID-19)により、園行事の多くが中止や形を変える中、行事の持つ本質についてもう一度見直す時期に来ているのではないだ

ろうか。

園行事として大きな催しの1つとして運動会があげられる。運動会については、勝木（1994）の「練習をしないうんどうかいをめぐっての事例」⁹の研究もあり、行事自体は行うが、それに向けた練習、つまり準備は行わないという例もある。行事を行う目的やねらいは園それぞれだといえるが、保育業務が形骸化し、さらには園行事が形骸化していく中、その本質をどのような視点から捉えていけば良いだろうか。先行研究では、金澤（2015）の「節分行事での子どもの体験と育ち」¹⁰の研究において、日本の年中行事を園に取り入れている中での、子どもの心の揺れや育ちを捉えた研究がある。また、青戸ら（2019）の「保育・教育現場における行事活動の意義」を問い直し、「自己表現と人間関係力」・「伝統文化」・「集団生活と学び」という3因子が行事の中で重要な項目であることを明らかにした研究等がある¹¹。さらには、恒岡（2015）の年中行事を民俗学的視点から捉えた研究¹²やケとハレの世界と園行事について考察されたもの¹³もある。しかし、先行研究からは、既存の園行事の実践報告や意味づけを行っていることに終始しており、日本文化に内在する根源的な要素から現代の園行事を理論化する視点においては、検討を加える必要がある。

本研究においては、園行事を行う上で重要な要素を明らかにし、行事の持つ根源的な要素が日本の伝統的行事文化や祭り文化に内在している要素と関連しうるのではないかという仮説を立てることとする。そして、その共通項を明らかにし、形骸化しつつある保育実践を園行事から考察し、園行事をより文化的な価値を置くものとして捉えることが出来るようにしていきたい。

2. 目的と方法

日本の保育施設における園行事の大きなものの1つとして運動会があげられる。運動会の端緒は、「19世紀ころ英国のオックスフォード大学で初めて行われたといわれる。我国では明治7年に海軍兵学校で行われた『競闘遊戯会』がその始まりという。そして明治16年に陸軍戸山学校・東京帝国大学で行われるようになってほしいに全国的に行われるようになった」¹⁴とされている。このことから、日本において運動会が取り上げられるようになった契機や時期を見てみると非常に軍事色の強いものであったことがいえる。実際に昭和期における日本の幼稚園の運動会では、「兵隊遊戯をする園児（東京・朝海幼稚園）」¹⁵のように戦争に向かうための意図が見えるような運動会が行われていたことも事実である。しかし、現代における保育者は、戦争はもとより、平和を伝えていく立場にある。日本においては運動会などの大きな園行事をもっともっと日本文化に内在する文化的価値に視点を置く保育教材として取り扱っていく視点を持ちたい。

本研究においては保育実践の形骸化という視点から園行事を行う意義に着目し、日本における伝統的な年中行事との関連について明らかにしていく。具体的作業としては、数ある園行事をカテゴリーに分け、日本の年中行事との接点を探っていくこととする。また、その中でも、運動会や発表会などの大きな行事においては日本の伝統的な年中行事には無い行事であること

から、それらの大掛かりな行事に特に焦点を絞りながら述べていきたい。その大掛かりな園行事の根源的な要素を考えた場合、日本の伝統的な年中行事の中でも特に大掛かりかつ、文化的な価値が非常に大きいと言える日本の祭り文化に着目したい。日本の祭りには、これまで人間が暮らしてきた生きた文化が内在している。保育・幼児教育という教育をもっともっと子どもにとって価値あるものにしていくためには、我々が生きてきた中で受け継いできた文化を大きな行事の中で子どもの内側にしみ込ませていくような営みが必要なのである。

祭りという年中行事を見た時に、ムラ文化という小さな共同体という集団における結びつきに着目することができる。さらにはその祭りに向けた共同作業や準備作業が持つことの文化的価値に焦点をあてていく。その、人と人との結びつきによる共同体文化が、園行事を行っている共同体にも内包されている。その内包されているものをさらに紐解いていくとよるこびに向かっていく文化があるのではないだろうか。

園行事は、パフォーマンス的なものや慣習に偏りがちになってしまうが、その根源を紐解いて行くと、現代を生きるための「生」へ向かう文化が内包されている。さらにその文化的な意味や価値は現代を生きる私たちが、未来の子どもが賢く逞しく生きていくことへの祈りを含ませながら共同体皆で作上げていくものであるという視点に立ち行事の持つ意味を深く理解していくこととする。この論考は方法論としてではなく、あくまで共同体のもつ文化的価値に焦点を当てたものとしたい。

3. 日本の伝統的な年中行事

現在の保育施設における園行事を見てみると、様々な行事が行われていると同時にその形態も園それぞれの特徴を活かしたものとなっている。現在行われている園行事を青戸ら（2019）は「①伝統的な行事（子どもの日や七夕など）、②成長の節目（入・卒園式・誕生会など）、③保育のまとめして行うもの（運動会・生活発表会など）、④日常と違った環境での行事（遠足・お泊り保育など）、⑤保健・安全を目的とした行事（身体測定・避難訓練など）」¹⁶としている。また、恒岡（2015）は、年中行事として行っている園行事を調査し上位から「正月行事（餅つき）、節分行事（豆まき）、桃の節句（ひな飾り）、端午の節句（こいのぼり）、七夕（笹飾り）」¹⁷としている。

ここで、年中行事という言葉について確認しておきたい。年中行事とは「もともと平安期の宮廷から出た言葉で、一年間に執りおこなう政治上の恒例行事を書き列ねた表や冊子があり、それを『年中行事』と言った」¹⁸とある。さらに、その根源を辿ると、「日本人が日本列島に棲み始めると、生きる営みのために自ずから協力組織すなわちある種の社会集団が形成される。そうしたとき、生活と生業が円滑に行われるため、一年間に定まったある時期や特定の日に、毎年繰り返して特殊な行為をおこなう慣習を生んだ」¹⁹ともされている。年中行事とは端的には上記のように説明できる。しかし、年中行事とひとことに言ってもその持つ意味合いは非常に深く広い。

文献から簡単に整理すると以下のようなになる。死祖霊をはじめとした神仏諸霊を祭祀したり、

邪悪なる厄神、疫神を追放したりして村や家の安寧幸福を図る正月行事²⁰。仏教民俗的な意味合いが強いとされる盆行事。また、稲霊・穀霊や田の神、水の神などを祀り、悪霊邪神を追放して稲の豊穰を図ろうとする稲作儀礼や畑作儀礼といったものが1つある²¹。また、「年中行事にはおのずとリズムが存在する。リズムは農事歴に基づく自然歴と密接な関係にある。」²²ともされていて、年中行事が自然の流れと密接に結びついた生活の中のリズムになっていたといえる。

また、恒岡（2015）の調査にあるように節句も年中行事の重要な1つである。節句とは「季節の節目の行事日のことでセチビ（節日）のひとつである」²³とある。「正月七日（人日）、3月3日（上巳）、5月5日（端午）、7月7日（七夕）、9月9日（重陽）。一般には、それぞれ『七草の節供』『桃の節供』『菖蒲の節供』『星の節供』『菊の節供』などという。しかし、それは、江戸幕府によって制定され、普及したものであった」²⁴とされ、宮中においても重要な行事とはされていない。とはいえ、「セチビは、なによりも家族や一族、近親者の無病息災を願うところに本義がある。中国の歴法が伝わる以前から、そして、むろん五節供が制定される以前から、節目や隙間から邪気悪霊が忍びこむのを未然に防ごうとする信仰が自然発生的に存在していた」²⁵とあるように季節の変わり目における無病息災を願う行事であったことが分かる。この節供においては季節の食材や自然物が関わってくることから、子どもに食や旬を通して伝えやすい文化であることが園行事として取り扱われる意図ではないかと推察される。

さらに、通過儀礼としての行事もある。これは毎年行われることではないが、一般的なものとして七五三があげられる。七五三は「かつて『7歳まではカミの子』といった。医療制度が未発達な時代での子どもの死亡率が高く、健やかな成長は、カミが掌握するもので、カミに祈るしかないとした」²⁶とあるように通過儀礼は子の健やかな成長を祈って年齢の折り目・節目に行われるのである。

このように簡潔に日本の年中行事を整理したが、この年中行事は「一年間の間に生産勤労の日と、休息慰安の日とが自然に組み合わせられ合理的に配置されている」²⁷とされている。しかし、この休息慰安という意味の年中行事であるが「それはたんなる休息慰安ではなく、異なった特殊な感情をもってこの日を迎えた。それはハレの日としての感情であった」²⁸ともしている。つまり、日常の「ケ」と非日常の「ハレ」である。またハレの日こそが年中行事の日であり、岩井は「すなわち何らかの意味で祭りをする日」²⁹とも表現している。つまり、年中行事＝祭りであり、単に体や心を休めるという事に留まらず感情を伴いながら、よるこびへ向かう文化であると解釈することが出来る。

4. 日本の農耕文化とハレの日を遠望し追憶する人々の「生」へ向けた感情

上述したように日本の年中行事は数々ある。その1つ1つが折り目・節目に行うという点においては、共通の要素を見出すことが出来る。しかし、それぞれの行事が持つ意味合いは共通している訳ではないことが分かってきた。また、行事1つ1つを見ていくと節供のように江戸時代という比較的現代に近い時代に出来上がったものもあり、江戸時代以前においてはあまり大きなものとして取り扱われていない行事もあった。このように、近年出来上がった行事を見て

も、文化の積み重ねを紐解くことは難しい。しかし、さらに過去に遡ればその文化の脈絡が見えてくる。その1つが農耕文化である。特に稲作は弥生時代またはそれよりも昔から始まった文化であるとされているがその時代を正確に知ることはここでは重要ではない。確認しておきたいことは、かなり以前から私たちの生活に根付いている文化であるということである。板橋が、「民間の年間行事の多くは、稲作を基調とした農耕儀礼が大半を占める。田植えに先立って田の神を迎え、田の神が見守る中で早乙女たちが稲を植えていく。終われば田植え終了祝いをして田の神に帰っていただく。田の神が天から降りてくることをサオリといい、田の神が天へ昇っていくことをサノボリという。そして、稲が稔れば収穫感謝の祭を行う」³⁰と述べているように現代においても稲作に関する行事は、重要なものとされている。石川県の奥能登に伝わる「アエノコト」³¹や青森県の「金木さなぶり荒馬踊」³²などもその一種といえる。また、「年の始め、すなわち正月に迎える年神は、穀霊たる農耕神であり、同時に祖霊たる祖先神でもある。一年のネンのは稔（ネン）であるし、トシも稲（トシ）である。日本人には穀物の生命（イナダマ）と人間の生命（タマ）が渾然一体と観念されていた」³³ともあるように、米が育つことが、命をつなぎとめることが出来るよろこびであり、逆に育たないことが命の危機につながるという程、日本人にとって稲作文化が重要であったことがいえる。実際に過去を遡ってみても律令体制下において米を税として取り扱い、その重い税に苦しんだ農民の歴史³⁴もある。また、冷害などの天候不順や自然災害も影響を及ぼした享保・天明・天保の飢饉にあるように、米の不作により全国各地の飢餓が甚だしかったという歴史も見られる³⁵。近年においても、冷害による米不足によりタイ米が輸入された歴史も記憶に新しい。このようにしてみると単に稲作が順調に進むように、という儀式としての祭りが行われていただけではないことが分かる。米が順調に生育することへの非常に強い願いと、逆に米が育たないことに対する自然への畏怖の念までがないまぜになりながら季節ごとの祭りへと向かっていったことがうかがえる。

まさに先述した「特殊な感情をもって」祭りに向かうという視点を垣間見ることが出来る。祭りが自然歴に基づくものであることから、その感情は自然そのものが密接に関わった中で湧き上がってくる人間の生きていくことへのこだわりそのものといえる。つまり、ただ単に「ハレ」＝祭りへ向かうのではなく、祭りがなくては生きられないという程の感情と捉えることができるのである。谷口が柳田国男の書物の解釈の中で、「年中行事が生活において重要なのは、人々がその日が来るのを心待ちに迎えるからであり、また行事の経験をいつまでも追憶するからであった。したがって、年中行事は過去と未来とに向かって『今で無いもの』を遠望する目標となり、『いつも心の片隅に現実以外の意識』をはぐくんできたのだろう」³⁶としている。ハレの日を遠望し、ハレの日が過ぎれば追憶するという人の心の中に確かなものとして残るこの感情の動きは現代に生きる人間にこそ必要な活力であるといえる。

5. 祭りの意義—ケの衰退とハレの永続性—

ここまで年中行事やハレの日へ向けた感情について取り扱ってきた。日本人の伝統的な生業に基づく祭りの存在が、人間の内面に感情的な高まりをもたらすことが明らかとなってきた。

しかし、行事や祭りを何故行っているのかという根本については、より根源的な意味を現理解してゆかなくてはならない。そこで、祭りの根源的な意味合いについて整理していくこととする。

柳田国男は、「祭りは、文字通りマツリ、つまり神霊の降臨するのを待つことを本義だとしていた」³⁷とあるように神霊との関連が強いものであることが分かる。また、「一年の年中行事の中でも、村や町の成員が一体となって営むのが『祭り』である。その祭りには春祭り・夏祭り・秋祭りとあるが、春祭りは豊作祈願、秋祭りは豊穰感謝の祭りで、『村祭り』すなわち農村の祭りである」³⁸とある。祭りは年に1度ではなく、季節の変化、穀物の育ちに応じながら定期的に行われている。このように数多く行われている祭りであるが、祭りを捉える上で非常に重要となるのがケとハレの考え方である。ケとハレについては民俗学的にみても様々な捉え方があるようだが、ここでは宮田の理論に注目したい。

宮田は、ケとハレ、またはその中間項としてのケガレについて説明した上で次の様なことを述べている。「一方ケ枯れ（離）論の立場からいうと、ケが稲霊の活力ひいては人間の生活を営む活力に相当するのであり、これが民俗的儀礼の基底にかかわっており、ケの維持は常に望まれている。ところがケは絶えず変化する状態を特徴としており、ケはつねに衰退していくとみられる。ケの衰退と消滅は、結果的には死を意味するが、人はそこに至る前に活力を再生させようと努力する。いわばそれは生への営みであり、民俗文化を形成させる源泉となり得る。それがハレ文化の基底にあるとみている。つまりハレの存在理由は、堆積したケガレの除去にある」³⁹としている。また、「ケの衰退と消滅」からはハレの日の存在理由、つまり、人間が死から遠ざかり、生へと「活力を再生させよう」とする意味合いを持っていることが祭りを行う本義として捉えることが出来る。また、「ケガレをケに復する場合に、そこに集中的なエネルギーが発生する。ハレには日常を脱却するため、異常に高揚する気力が必要であり、それはハレの時間と空間を維持するために欠かすことのできない側面なのである。現象的には、祭りに発散する人々の情熱であり、それはさまざまな型となって表れている。さらに突きつめてみれば、そのエネルギーは儀礼を維持している力なのである。人々はハレの時間と空間を通過することにより、ふたたびケの状態を維持でき、次に訪れてくるケガレの堆積を待つのである。この循環理論を積極的に文化現象の構造化に利用しようとする立場は、次第に顕著となりつつあるといえよう」⁴⁰とある。

ここで注目したいのは「ハレの時間と空間を維持する」という概念である。単に、ハレに向かう心情のみが重要なのではなく、ハレの最中における時間と空間の維持がよりそのハレを充実したものとし、ケを維持していく力となるのである。ハレの時間と空間を維持するものとしては、芸能を取り上げることができる。「日本人が古くから行ってきたマツリは、本来は宗教的儀式なのであろうが、早くから芸能的諸要素を拡張させていて芸能ときりはなせない形をとるに至ったものが多い」⁴¹また、本田は、日本の芸能が宗教と密接に関わっていることを述べた上で「昔の人の心を最も強く牽きつけたものは、生命の神秘ということであった。生命のもとをなすものを魂と名づけ、最も強大な魂を神と呼んだ。神は天にましまし、すべて生命の生はこ

の魂の下降、死は昇天と考えられていたと解釈される」⁴²としている。加えて本田は「強力な魂を呼ぶ一即ち、神を降す一ためには、清浄な巫女が恍惚状態とならなければならなかった」⁴³と述べているように、芸能、つまり祭りのハレの時間を維持するためには、その時間の充実が望まれたのである。その点においては、真野が、「祭りとは、ふつうその社会に定期的にめぐってくる、カミとの交歓の機会である。人々は祭りをとおして時間の永遠性とであり、世界の根源にあるものを知り、人と人とのきずなの絶対性を確かめ合う。そうして人々は、また世界は、ふたたび生まれ変わることができる」⁴⁴としている。このように「ハレの時間の永続性」が必要であり、その永続性がハレの日を遠望し、追憶することでケの維持となりうるのである。

このように、ケとハレ、いわゆる日常と祭りが繰り返されながら人間はその生命を維持していることが分かる。真野は祭りの持つ根源的な要素を見つめながらも、現代の社会においても投影させるという示唆的な視点で次のように述べている。「祭りはそのどのような意味あいにおいても現にその時を生きているもの、その社会に生きているものによっておこなわれる行為である。社会的文化的な側面からみれば、祭りはその瞬間瞬間の脈絡のもとで一定の意味をもつ表現行為といえるだろう」⁴⁵としている。祭りが「現にその時を生きているものその社会に生きているものによっておこなわれる行為」という視点に立てば、過去の伝承のみならずその土地土地で生きて行く人間が、または社会が作りだしていく文化であるといえる。

6. 「籠る」文化—共同体の凝集性と準備期間の持つ意味—

これまで、祭り文化が神霊的な要素、宗教的な要素、又は芸能的な要素を含みながら行われる行事であることが明らかとなった。しかし、それだけではない。祭り文化には、そこに生きる人々がケの衰退、つまり死から逃れ、ハレに向けた生への強い思いやハレを維持し、その時間空間の永続性を根幹に成される行事あることを確認することができた。ここでは、さらに祭りの文化に内在する要素を深く掘り下げ現代にも投影できる要素について見ていきたい。

祭りは、華やかな山車や踊りを伴うものもあれば、厳粛で静なるものもある。真野も「祭りの表現はけっして単色ではない。荘厳と華麗、静寂と喧騒、静止と躍動、明と暗、はては神聖さと通俗さなど、さまざまな局面がさまざまなコントラストで色どられ、またそれらのコントラストがからみあう複雑なリズムをともなって祭りは進行していく」⁴⁶と表している。このように祭りは単調な催しではなく、強弱の伴う行事であることが分かる。また、宮田は「われわれが、祭りだと考えているのは、柳田説に言わしめると実はこの賑やかな二次的な部分だという事になる」⁴⁷と述べている。加えて「祭りには、表に現れている部分と隠れた部分とがある。表の部分は、たぶん誰でも参加できる演出され易い面である。神霊を迎え祀るという一事は、地域住民の精神生活にとって、歴史的にも重みのあることであり、いわゆる他所者がやたらに介入できる場面ではない」⁴⁸としている。ここでは、他所者がやたらに入ることが出来ない一次的な段階と比較的参加演出しやすい二次的な段階があることがいえる。

さらに、真野は柳田国男が『籠る』ことが祭りの本体である⁴⁹という視点から、祭りの籠る行為について検討を行っている。籠る祭りには、京都府相楽郡山城町や愛知県北設楽郡一帯の白

山の浄土入りなどがあげられる⁵⁰。両者の祭りの籠り方は異なるが、どちらも静寂な中での進行が成されている点では共通といえる。三浦は「実は、見方を変えれば、祭りは事前の儀式からずではじまっている、ともいえるのだ。つまり、来るべく本格的な祭りにそなえ、さまざまな儀式をとり行うこと自体、小さな祭りの積み重ねなのである。その儀式は、祭りの数日前からはじまるものもあれば、数か月前からはじまるものもある」⁵¹としている。真野はあらゆる籠りから祭りの持つ本質を考察し、「柳田が祭りの本体とまでいいきった籠りとは、明らかにこの世に生まれでてくるべき赤子の生前のすがたにほかならない」⁵²。また、「赤子が母の胎内で夢をみるように、人間たちの社会は、籠りという場のなかで、みずからの生まれ変わりのための夢をみるのである」⁵³という捉えをしている。このように祭りは、そのハレの中で二段階の展開を見せるものがある。その二段階のうち賑やかではない方にその祭りの本体があり、実はその中でハレの二段階目に備えているのである。その静の時間空間を経てこそ、二段階目の賑やかなハレを豊かに膨らませることが出来るのである。

次に、祭りの一・二段階をつくり出す上で重要となるムラの共同体について見ていきたい。真野は「祭りとはかならず一定の社会集団によって担われるもの」⁵⁴であるとしている。その根源的な組織集団をみるとムラという社会集団がある。青木は「ムラという共同体のなかで『まつり』も生まれた。そして、まつりを維持してきたのである」⁵⁵とし、「なぜ、まつりを行うのだろうか。めいめいの信仰心はともかくとして、そこには『共』（共同体）の意義がある」⁵⁶としている。さらに、「まつりは、年中行事は、人びとがそこに集住したときから存在した。それには、イエの行事もムラの行事もあった。（中略）ただ、古くさかのぼればさかのぼるだけ、共同体での結束をつよくはからざるをえないところで、ムラの行事がさかんに行われただろう」⁵⁷ともしている。また、祭りには必ず前後があり、「まつりの前後にコトはじめ、ことじまいという行事がある」⁵⁸これらは頭屋行事であることが多く「カミを迎えるにあたって頭屋宅などを清掃し、特に竈を祓う。まつりを終えてカミを送ったあとは、そうした潔斎を解く行事となる」⁵⁹とある。このように祭りに向けて頭（かしら）を決めて行うことだけに留まらずムラという共同体の中で、結束を固めながら祭りを作っていたことが分かる。また、「三、四〇軒というのは、ムラのまつりを執行する、その労働力としても必要な個数である」⁶⁰、その中でも、「この種の伝統的なまつりは、当番組はふつう一〇軒から二〇軒の単位」⁶¹ともあるようにムラの祭りを形作っていた構成員は、集団として見た時にも関係性として見た場合にもお互いの人となり把握できている関係性であるといえる。また、このムラ文化は、田植えや葬儀などの、祭り以外の部分においても存在していた。つまり、祭りそのものに向けた準備を本格的に始めるにあたっての頭屋などを中心とした組織だけではなく、祭り以外、つまりケと呼ばれる時期の組織内における活動が非常に重要となることが日本のムラ文化からみてとることが出来る。言い換えれば、ケつまり日常における組織内において、“祭り以外の期間自体”が“祭り・行事に向けた準備期間”であることがいえる。ムラが頭屋を中心に祭りに向かい凝集していくためには、ケの期間における組織内の帰属意識が非常に重要ということである。

また、祭りに向かっていく段階ではしきたりがあり、しつけがあったとされている。「まつり・

行事をとおして、つまり共同作業をとおして教えるまた、習う。学ぶ」⁶²としている。このように、子どもは祭りに向かっていく大人を見て自然とその文化を受け継いでいったのである。

7. 祭り文化を園行事へ

ここまで民俗学的視点から年中行事、特に祭り文化に内包された人間が生きていく上で大切な根源について明らかにしてきた。ここからは、園行事に日本の祭り文化がどのように内包されているのかについて整理していきたい。保育における園行事では節供など季節の変化が感じられたり、柏餅などの食を通して文化を伝えたりする側面がある。しかし、節供などの行事を探るだけではその根源を紐解くことは出来なかった。そこで、運動会等の大きな行事は何故行うのかという根源的な問いに対して、日本の農耕文化と祭りに焦点をあててその共通点を探ってきた。その結果、次の3つの点において保育における行事を取り行って行く上での示唆を与える点を見出すことができた。

1つ目は、ケとハレの概念である。日本の祭りにおいては、ケとハレの概念が重要となる。その中でも本研究においては、日本における稲作文化を基底としながら人間が「生」へと向かっていくための文化が内包されていることが示された。このように、祭りを通して、ケの衰退と消滅から「生」へと活力を再生させるという視点は、現代の暮らしの中においても十分に投影しうる概念である。園行事を何故行うのかという問いに対してもこの文化的な概念は非常に有効といえる。ケやハレについても単にケ＝日常というくくりで捉えるのではなく、ケは日常の中で絶えず衰退していき消滅しかねないものとして捉える必要がある。また、ハレにおいても、単にハレ＝祭りとしてのみ捉えるのではなく、ケの維持にハレが欠かせないものであり、ハレがあるからこそケを維持しうるものであるというように互いに関連し合っている概念なのである。そのような視点からしても、園での生活を豊かに彩っていくためには園行事が欠かす事の出来ないものとして存在しうるのである。宮田の述べる「ハレには日常を脱却するため、異常に高揚する気力が必要であり、それはハレの時間と空間を維持するために欠かすことのできない側面なのである」という解釈からは、ハレつまり園行事が日常を脱却しうる程の高揚を伴ったものであることが重要といえるのである。そうすることで、真野の述べるような「祭りをとおして時間の永続性とであい、世界の根源にあるものを知り、人と人とのきずなの絶対性を確かめ合う」ことができるのである。園行事が時間の永続性や人と人との絆の絶対性を確かめ合えるようなものとなれば、祭りに向かって遠望し、追憶する程のハレの日として存在しうるのである。

2つ目は、籠る文化である。本研究において、祭り文化に内在している要素を抽出した結果、賑やかな祭りの本番は実は二次的な意味合いを持っていることが明らかとなった。その二次的な意味合いを園行事としてみた場合、園行事の当日または本番として捉えることができる。では、祭りの一次的な部分は園行事においてはどの部分にあたるだろうか。それは、二次的な祭りが園行事における運動会なら、前段階にある総練習という安易な形ではないと捉えられる。今回示した籠りという文化は、京都府相楽郡山城町の祭りが家族で籠り、愛知県北設楽郡一帯

の白山の浄土入りの籠りが一定の集団で籠っている。この籠りからは、二次的な祭りとは比べて、より小さな集団で籠ることが特徴であるといえる。また、この籠りは賑やかな外側に発散させるような二次的部分とは異なり、内側に向かって行くような静なる籠りであるといえる。園行事としてみた場合、この静なる籠りは総練習などではなく、クラス集団内などにおける小さな集団で籠ることと解釈することができるのである。これは単に小集団で集まるという解釈ではない。小集団で集まるというだけではなく、小集団内で内側に、内側に向かっていく様子や行為でもあり、集団を超えて1人の人間として内省する籠りでもあるのである。この籠りは、行事に向けて進んでいく中で子どもたちが自己を内省し、子どもだけではなく、保育者や保護者それぞれが小集団で、又は個人で次なる二次的な祭りに向けてエネルギーを蓄える行為であるといえる。これはハレをより高揚させるためのものでもあり、「生」へ向けた大切な時間・行為であるといえることができる。

3つ目は、ムラ文化の凝集性とケの維持ある。日本の祭り文化が形成された根源を紐解いていくと、町ではなく、ムラという凝集性の中で祭りが営まれてきたことが分かる。このムラ文化は祭りの時の為に存在しているのではなく、田植えや葬儀など祭り以外のいつの時も重要となる共同体である。この共同体はその地で生きていくために、結束を強くせざるを得ない共同体、つまり「ケを維持するために存在しうる共同体」なのである。田植えや葬儀などを、行わなければならないが家族のみでやるのは難しいことをムラの共同体の手を借りて行う。調味料を切らしたために隣の家に分けてもらうようなことも同じである。つまり日常の維持に不可欠な関係性といえることができる。このことを園行事にあてはめた場合、園行事ではない期間における共同体内の存在が重要となる。園の日常をつなぎとめる為に必要となってくる関係性、つまり子ども同士、子どもと保育者、保育者と保護者、保育者同士など園を形作っているそれぞれの関係性や凝集性である。例えばある子どもが出来ないことがあれば、他の子や保育者が手伝う。また保育者が出来ないことを子どもが手伝ったり、他の保育者が手伝ったり、保護者が手伝うこともあるだろう。このようなケを維持していくために必要な関係性の存在が重要なのである。この持ちつ持たれつの関係性の反復がそれぞれの関係性を強化し、ハレとしての祭りの高揚へとつながっていくのである。つまり、ケの維持を土台にした関係性の構築なしにはハレの高揚は大きなものにはなりにくいのである。したがって園行事を高揚したものにするには、日常を維持するための人と人との持ちつ持たれつ関係性が必要不可欠なのである。

8. まとめ—人と人がよろこびに向かって生きていく契機の創造—

これまで述べてきたように日本の年中行事は、1年間の節目・折り目としてのリズムを作る大切なものとして存在しうる。その中でも祭りは、農耕文化と深い関わりを持ちながら私たちの暮らしを豊かなものにしてきた。本研究においては、祭りに内在するケとハレの文化、籠る文化、ムラという共同体の中で関係し合う人と人の存在が、祭りをより盛大なものにしていることが明らかとなった。またこのことが園行事を行う上で非常に重要な要素であることも示された。

現在の生活に目を向けて見ると、祭りそのものも形骸化してきていることが懸念されている。それは、人と人とが関係し合わなくなったという点に見ることができる。特に情報技術の目覚ましい発展からは、人は人に会わなくても良くなった。さらには、生活を維持していくために人の協力がいらなくなった。モノを買うにも電話やネットで買うことができる。そのような昨今において、人はつながることで豊かになるのではなく、つながることで面倒なことが起こる要因でしかなくなりつつある。しかし、子どもに残したい文化とは一体何なのであろうか。それは、人が面倒で近づきたくない存在としてあるのではなく、人がよろこび合える対象として存在する文化ではないだろうか。

ここで、文化という語について確認しておきたい。文化とは「本能に基づくものも含めた、ヒトの生きる営みの総体を、最も広い意味で文化と呼べるだろう。(中略)それが受けつがれ、学習されるものである以上、個人をこえた集合的性格を、時間的にも世代から世代へ、空間的にもある範囲の人間の集合がもち、個人に対して何らかの拘束力をもつという側面を無視できない。(中略)民俗学における民俗が、このような文化のほぼ同義語として、研究上もつ意味もそこにある」⁶³とある。個人をこえた集合的性格や個人に対して何らかの拘束力を持つという側面からすると、現代に生きる人々にとって非常に堅苦しく狭い印象を受ける。しかし、現代社会における生きづらさの根源はこの点を無視して生きている点にあるのではないだろうか。簡単に何でもでき、面倒なことは排除する。しかし、人との関わりは排除しては生きてはいけないのである。高田は民俗学的視点を保育にも取り入れ、教材化する視点を次のように述べている。「内在する諸価値(文化的)を教材化する目線を『人と人が快いものに向かって響き合い、共感し合い、力を合わせていく人間らしくいきっていく願いや熟成させていくなかで自分が何にこだわっているのか、精神のありかを鮮明にしていくこと』に定位することは当然のことである」⁶⁴としている。現代社会において、人との関係は希薄で単に表面だけが問題なく見えるように繕われながら結び付けられている。子どもに伝えたい文化は高田の述べるような、人と人とが快いものに向かって響き合う文化なのではないだろうか。

これまで、祭り文化と園行事について述べて来た。園行事を催す上で、やるかやらないか、という二分した議論になりがちな昨今の行事の取り扱いであるが、結論を述べていきたい。園行事を行うにあたっては、祭り文化に内包する要素を取り入れながら園に関わっている人と人をそこに生きる民俗として位置付けながら催していくことが重要であることが示唆された。そして、園行事は毎年行っているからやるという短絡的な考え方ではなく、その行事という教材を取り扱うことで、子どもに何を伝えたいか、子どもの何を育てたいのかを明確にした上で教材化する視点を持ちたい。また、幼児期であるからこそ、子どもが様々な人と関わっていくことによるこびを感じられるような内面を育ていく視点が必要である。園行事を人と人とがよろこびに向かって生きていく契機として位置付けながら、これからの園行事の構成の為の一考察としたい。

〈引用文献〉

1. 「厚生労働省 - 待機児童解消に向けた取組の状況について」2020年10月1日時点
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000544884.pdf>
2. 脇貴志『事故と事件が多発するブラック保育園のリアル』株式会社幻冬舎 2016, p. 21
3. 野崎秀正・小笠原文孝・佐々木昌代・大坪祥子・崎村英樹・木本一成・石井薫・勝田芳孝・崎村康史「保育士の専門性向上に伴う保育業務の変化の実態と課題」『保育科学研究』2018, 第9巻p. 57
4. 同掲, p. 57
5. 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領』内閣府・文部科学省・厚生労働省 2017
6. 野崎秀正・小笠原文孝・佐々木昌代・大坪祥子・崎村英樹・木本一成・石井薫・勝田芳孝・崎村康史「保育士の専門性向上に伴う保育業務の変化の実態と課題」『保育科学研究』2018, 第9巻p. 58
7. 森林・七木田敦・青井倫子・廿日出里美・横松友義「行事場面における保育者の行動特性」日本保育学会大会研究論文集(44) 1991, pp. 32-33,
8. 奥山順子「幼稚園と家庭との連携 一園行事の実施と幼稚園教育の役割一」秋田大学教育学部教育工学研究報告 第19号1997, p. 117
9. 勝木洋子・森川紅「園内行事うんどうかいの検討：練習をしないうんどうかいをめぐるの事例」日本保育学会大会研究論文集(47) 1994, pp. 502-503,
10. 金澤妙子「節分行事での子どもの体験と育ち—雪国の園での観察から」教育学研究紀要(6), 2015-06, pp. 65-84,
11. 青戸泰子・菊地愛未・田邊資章「保育・教育現場における行事活動の意義」人間環境学会『紀要』第32号2019, pp. 1-11
12. 恒岡宗司「幼稚園における『年中行事』の取り扱いに関する一考察—奈良県公立幼稚園・こども園の実態調査から—」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要(46) 2015, pp. 33-53
13. 尾崎 春人・中川 美樹「ハレ(祭り・聖)の世界と保育 [II]～保育の中の行事の実態をハレの世界(視点)から考察する～」日本保育学会大会研究論文集(53) 2000, pp. 236-237
14. 浅見均「現行幼稚園教育要領下に於ける『園行事』のあり方についての一考察 一幼稚園に於ける園行事「運動会」を中心として一」青山學院女子短期大學紀要(53) 1999, p. 84
15. 日本保育学会編「写真集 幼児保育百年の歩み」ぎょうせいp. 118
16. 青戸泰子・菊地愛未・田邊資章「保育・教育現場における行事活動の意義」人間環境学会『紀要』第32号2019, p. 2
17. 恒岡宗司「幼稚園における『年中行事』の取り扱いに関する一考察—奈良県公立幼稚園・こども園の実態調査から—」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要(46) 2015, p. 43表1
18. 岩井宏實『日本人祝いと祀のしきたり』株式会社青春出版社 2012, p. 12
19. 同掲, p. 13

20. 赤田光男・天野武・野口武徳・福田晃・福田アジオ・宮田登・山路興造『日本民俗学』株式会社弘文堂 1984, p. 103
21. 同掲, pp. 107-109
22. 谷口貢・板橋春夫『年中行事の民俗学』八千代出版株式会社 2017, p. 1
23. 青木誠一郎『しきたりの日本文化』株式会社角川学芸出版 2008, p. 88
24. 同掲, p. 88
25. 同掲, pp. 89-90
26. 同掲, p. 145
27. 岩井宏實『日本人祝いと祀のしきたり』株式会社青春出版社 2012, p. 13
28. 同掲, p. 13
29. 同掲, p. 13
30. 谷口貢・板橋春夫『年中行事の民俗学』八千代出版株式会社 2017, p. 1
31. 三浦竜『日本人の祭りとい』2008, pp. 159-160
32. 星野紘・芳賀日出男『日本の祭り文化辞典』2006, p. 63
33. 岩井宏實『日本人祝いと祀のしきたり』株式会社青春出版社 2012, p. 21
34. 日本史教育研究所『日本の歴史—歴史の流れをつかむ』株式会社新泉社 2017, pp. 17-18
35. 同掲, p. 131
36. 谷口貢・板橋春夫『年中行事の民俗学』八千代出版株式会社 2017, p. 34
37. 宮田登『暮らしと年中行事』株式会社吉川弘文館 2006, p. 34
38. 岩井宏實『日本人祝いと祀のしきたり』株式会社青春出版社 p. 4
39. 宮田登『民俗学の方法』株式会社吉川弘文館 2007, p. 5
40. 同掲, p. 6
41. 本田安次『芸能』有精堂出版株式会社 1979, p. 23
42. 本田安次。郡司正勝『伝統芸術講座第四巻民俗芸能』河出書房 1954, p. 50
43. 同掲, p. 51
44. 真野俊和『日本の祭りを読み解く』株式会社吉川弘文館 2001, p. 51
45. 同掲, p. 2
46. 同掲, p. 8
47. 宮田登『暮らしと年中行事』株式会社吉川弘文館 2006, p. 34
48. 同掲, p. 34
49. 真野俊和『日本の祭りを読み解く』株式会社吉川弘文館 2001, p. 43
50. 同掲, pp. 38-42
51. 三浦竜『日本人の祭りとい』2008, p. 165
52. 真野俊和『日本の祭りを読み解く』株式会社吉川弘文館 2001, p. 51
53. 同掲, p. 52
54. 同掲, p. 50

55. 青木誠一郎『しきたりの日本文化』株式会社角川学芸出版 2008, p. 105
56. 同掲, p. 106
57. 同掲, p. 109
58. 同掲, p. 107
59. 同掲, p. 107
60. 同掲, p. 117
61. 同掲, p. 116
62. 同掲, p. 119
63. 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄『日本民族大辞典 下』
2000, pp. 498-499
64. 高田敏幸「津軽半島、今別町に伝わる民族舞踊『荒馬』を教材化し、子どもたちに“こだわりの荒馬”を伝える」(全国保育問題研究協議会編集委員会編:『季刊保育問題研究(210)』)
2014, p. 23